

## 多様なメンバーで 地域課題に取り組む

認定特定非営利活動法人地域福祉を考える会

認定特定非営利活動法人地域福祉を考える会は、神奈川県伊勢原市とその周辺を含めた地域に縁のある医療機関の医師、福祉施設の関係者、大学教授、地域住民らが地域課題の解決に向け、任意で集まり学び、ことから始まった団体だ。「ひとりほっちに寄りそって」を理念に掲げ、活動をけん引してきた中心メンバーにお話をうかがった。



「子育てひろば“きらきら”活動」のひとつ。遊びながら子育ての相談にのることもある

### ●「考える会」から「考動する会」に

1992（平成4）年、現在の認定特定非営利活動法人地域福祉を考える会（以下、地域福祉を考える会）の原点となる「福祉の情報交換・勉強会」が任意団体として発足した。活動の範囲は伊勢原市を中心に、厚木市、秦野市、平塚市と広域におよび、団体を構成するメンバーも医療従事者、大学教授、福祉施設関係者、地域住民ボランティアと多彩な顔ぶれがそろった。

現在、地域福祉を考える会の副理事長で事務局長の中台和子さん（71）は、参加を決めた時の思いを次のように話す。

「任意団体ができる以前から、障害のある人や高齢者に関わるボランティア活動をしてきたこともあり、障害があっても高齢になっても暮らしやすい街にしたいとの思いがあつたんです。そのためには、そこで暮らす人たちが支え合うことが必要だと思いました」

発足当初は、高齢化社会がもたらす地域課題について、月に1度、メンバーで

「考える会」だったが、2000（平成12）年に介護保険制度が導入されてからは、より具体的な活動が必要との機運が高まり、考えて動く「考動する会」と発展した。現在、登録しているボランティアは約80人。複数の活動をかけもちしている人、自分の得意分野に絞って活動している人など、参加の仕方はさまざまだ。

### ●ニーズに応じて事業を多角化

2001（平成13）年、地域福祉を考える会は、最初の「考動」として「友愛



子ども食堂の開催日は、毎回約20人の調理ボランティアが腕を振るう

電話活動」を開始。これは、ボランティアがあらかじめ登録されている利用者に電話をかけ、約15分程度会話するというものだ。利用は無料で、開始当初は独居および日中独居の高齢者の安否確認が主な目的だったが、2016（平成28）年からは子どもをもつ母親の育児相談にのったり、家にこもりがちで障害のある当事者にも対象を広げている。

2005（平成17）年からは、「ママ友ができない」「育児の悩みを相談する手がいない」といった母親たちの声に答え、「子育てひろば」活動」を開始。市の複合施設内に場所を借り、週1〜2回の午前10時から12時まで、誰でも自由に入りができる場として開放した。参加費は1家族100円で、毎回、ボランティアが、サポーターとして常駐し、先輩ママとして相談にのったり、ママ同士をつなげるなどの役割を担う。利用者からは「親子ともども交流できる場があつてありがたい」「育児の不安や愚痴を聞いてもらえて心が軽くなった」といった声が寄せられている。

ほかに、児童コミュニケーションクラブ（学童保育）を委託事業で請け負い、2002（平成14）年にはオンブズパーソン事業から成年後見活動に事業を展開し、主にハンディキャップのある方々の支援にあたるなど、地域福祉を考える会がカバーする範囲は広い。副理事長で、主に成年後見に関するボランティアとして活動している船橋晴さん（78）は「まだまだ

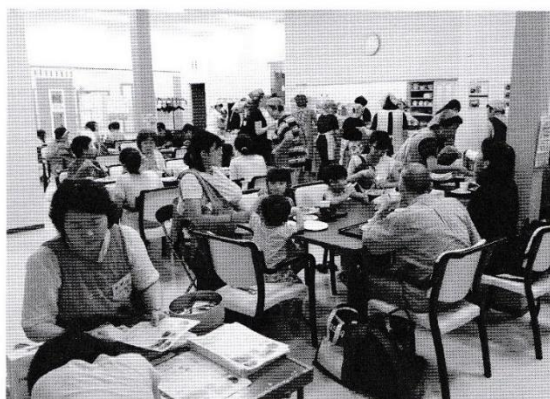
だ課題はありますが、地域版の『ゆりかご』から募場まで』にしていきたい」と話す。

## ● 2016年から始まった 新たなふたつの事業

### 子ども食堂

任意団体の発足から20年以上が過ぎた今、新たな地域課題のひとつに「子どもの貧困」がある。2014（平成26）年、厚生労働省の「6人に1人の子どもが貧困状況にある」との発表を受け、他市の子ども食堂を視察し、運営ノウハウの研究に乗り出した。そして、2016年6月、伊勢原駅の近くに「いせはらみらいクルリンこども食堂」を開設。当初は、経済的な理由で十分な夕食を食べることができない子どもや、保護者が仕事などで不在のために孤食となっている子どもたちを対象にしていたが、開設してみると、障害のある人や独居の高齢者たちからも数多くの参加希望が寄せられ、現在は、誰でも利用できる子ども食堂として月2回、運営されている。中台さんは、



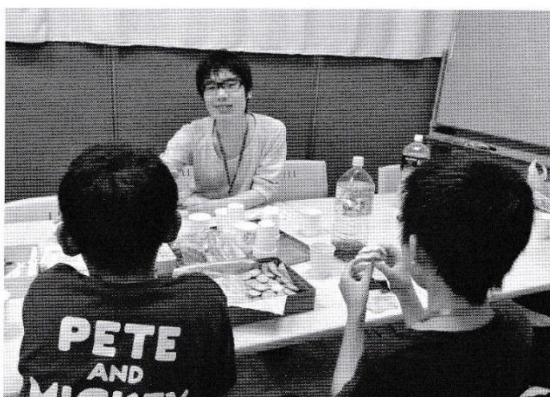


子ども食堂には平均して約80人が集まる。これまでの最高来場者数は120人

この状況について「地域のつながりが希薄な時代ですが、誰でも利用可能な子ども食堂を介して、地域がつながり始めています」と話し、笑顔を見せる。一食の料金は大人300円、子ども（高校生まで）100円で、おかわり自由だ。

### 学習サポート

子ども食堂の開設から3か月後、地域福祉を考える会は、貧困が学歴格差を生み、低学歴が貧困につながるという負の連鎖を断ち切ることを目的とした「学習



学習サポートの控室で、お菓子を食べながら大学生と楽しそうに話す子どもたち

サポートみらい・つなぐ事業」を開始。対象は小学校5年生から中学校3年生まで。利用料は、月500円。

ほぼマンツーマンで学習指導に当たるのは、元教員の地域住民ボランティアと、地域にキャンパスを構える東海大学の学生たちだ。本事業のコーディネーターで元教員の細谷毅義さん（65）は「学習支援をする前に、まずは子どもたちが、この場所に通いたくなるような工夫をしなければなりません」と話す。それが、大

学生と子どもがマッチングされるまで待機する控室の存在だ。学習スペースに隣接する控室には長机があり、その上にはおやつが置かれている。そのおやつを囲むようにして並べられたいすに、大学生と子どもたちがランダムに座り、おやつを食べながら談笑するのだ。細谷さんは「この何気ない時間が、大学生と子どもたちの距離を縮めていることは確かです。また、子どもが自分の将来を思い描く時に、大学生の存在がいいモデルになり、学習意欲につながることもあると思います」と話す。

子どもたちからは「勉強して、将来は警察官になりたい」「学校の勉強は嫌いだけど、ここでやる勉強は楽しい」といった声が聞かれた。なお、学習サポート事業は開始されて間もないが、今春、利用者のうち、ふたりが高校に進学した。そのうちのひとり、高校生になってからこの場所を訪れ、自主学習にはげんでいるという。

### ● 今後の展望



## 誰にでもできる 地域福祉の推進

認定特定非営利活動法人地域福祉を考える会

副理事長 事務局長 中台 和子さん

副理事長 成年後見部会 船橋 晴さん

地域福祉を考える会の草創期からのメンバーである中台さんに、これまでの活動を通して印象に残っていることを尋ねた。「0歳で『きらきら』に来た子が1歳、2歳と成長していく姿や、学習サポートに来ている子どもがテストでいい点数をとって喜んでいる姿など、子どもたちが成長していく姿は記憶に刻まれていきますね」と中台さんは笑顔を見せる。さまざまな地域課題の改善、解決に向けて精力的に取り組む中台さんのことを、船橋さんは「当会の原動力的存在です」と話す。そこで、中台さんに、原動力の源について尋ねると「健康に生まれて、両親のもとで不自由なく育ったことが活動の原動力です」と即答だった。中台さんの言葉に当てはめてみると、私たち一般市民の多くが、中台さんのように活動をする力をもっていることになる。今一度、自分が暮らす地域の福祉について考えてみるとよいかも。一見、誰かのために見えることも、そこで暮らしていく限り、結局は自分のためになるのだから。



「今後は、高齢者の生活を見守りながら皆さんが過ごしやすい地域社会を考えていきたい」と話す船橋さん（左）と中台さん

### 認定特定非営利活動法人地域福祉を考える会

所在地 神奈川県伊勢原市田中 256-1-301

電話 0463-95-6665

ホームページ <http://tiikifukushi.com/>

Eメール [office@tiikifukushi.com](mailto:office@tiikifukushi.com)

事業開始年 1992年

実施事業 子育て支援事業、子ども食堂、学習サポート、高齢者の見守り、成年後見事業など

ニーズに応えるようにして、そのつど、多様な事業に取り組んできた同会だが、喫緊の課題は財政の拡充だ。経理担当理事で、かつては市の職員だった鶴飼恒雄さん(70)は「どんな活動でも、関わった相手の笑顔を見る時ほどうれしいことはありません。その笑顔を守るためにも、ニーズの高い事業については、持続可能

な財政基盤を整えていく必要があります」と話す。現在のところ鶴飼さんが毎年、数多くの助成団体に申請し、採択された助成金で切り盛りしている状況だ。時代が変われば、ニーズも変わる。事業内容も、それに合わせていかななくてはならない。中台さんは「ニーズの低くなった事業については、状況を見ながら

閉じる決断も必要だと思います」と話す。事業を閉じることは、残念なことのように思えるが、地域課題が解消あるいは改善された結果なのだとしたら、それは喜ばしいことだ。そう考えると、地域福祉を考える会のすべての事業に対するニーズが減少していくことがこの会の展望だといえるだろう。